

ハイスクール
G×D×G×D

刀花子爵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたら転生してました。

死因は急性アルコール中毒。

飲みすぎはダメです絶対。

目次

死因は酒	1
死因は酒 2	6

死因は酒

「…頭、痛い」

だるさと吐き気、頭に響く鈍痛で目を覚まし俺は寝ていたソファーからパン一の体を起こした。

まだ、酔い酔いが残っているのだろうか？体が軽く感じる。

ソファーの周りと机の上には空になった皿、酒瓶、缶ビールのつぶれた残骸。なんでこんなことになってんだ？

現状の原因を思い出すためにまだ痛む頭を使いながら記憶を探る。

確か、次の日は休みという事で好きな映画のDVDをレンタルして。

仕込んでおいた燻製や、牛肉やらをつまみにと思い料理して。

いくつかの酒も明けたんだけれども、一人で飲むのも寂しいからって友達呼んで。

馬鹿みたいにはしゃいで…だめだこっから思い出せん。

完全に飲みすぎで記憶が飛んでる。

時計に目をやると我が家のデジタル時計は十三時を表示しており少ない休日の半分

を寝て過ごしていた現実を表している。

さらには俺が来ていたであろう服。

とりあえずは舌の先にざらつく歯垢と眼がしらについている目糞を気持ち悪く思い洗面所に行くことにした。

次の瞬間驚くとは思わないまま。



「なんじゃーりやあああああああああああああああ！」

歯を磨き顔を洗い幾分かさっぱりした自分の顔を映す鏡は明らかに自分のものではない何かを映していた。

「…俺は上野灰、正解」

鏡の中の何かも口を動かしている。

だが鏡に映されている顔は慣れ親しんだ釣り目の厳つく老けた顔ではなく若く少々垂れ眼の色の違う両目。

確か、虹彩異色症。

俗にいうオッドアイというものはず。

「いや、まってまって」

慣れ親しんだ剛毛の黒い髪も柔らかく肩まである白いものになっている。

「年齢、二十五歳」

鏡の中の自分も変わらずに同じように口を動かしそれが自分であることを裏付けていた。

ただし。

その見た目は昔から見ていた自分のものではなかった。

「不正解」

鏡の中の自分は明らかに小学校高学年のものだったのだ



とりあえず、酒盛りの残骸をかたずけていると見覚えのない茶封筒が一枚机の上に置かれていた。

友人の誰かの忘れものだろうか？

いや、でも宛先は俺の名前になってる。

送り主の所には神と書かれている。

「酒に酔ってふざけすぎたか？」

とりあえず、開けると中には紙が一枚。

ご丁寧に伴啓から始まっている。

「…誰だこれ書いたの？」

今回呼んだ友人全員の顔を思い浮かべる

まあ、いいや。

目を通すところということが書かれていた。

『死んだので転生させました』と。

そうか、死んだのか俺。

「そっか、そっか。俺死んだのか」

死因は、急性アルコール中毒。

昔読んだことのある二次創作のテンプレオリ主の如く死者が一定数超えた記念にと神様から転生特典をもらいライトノベルの世界に転生。

戸籍もあり、家もあり（家族はなし）、生活費は月に一定額口座に振り込まれ（俺の前職の給料の十倍）好きに生きていいと。

ご丁寧に通っている学校なども手紙に記載されていた。

死因は酒2

外に出てみればやっぱり慣れ親しんだ町ではなかった。

駒王町って何県だ？

…徳島の慣れ親しんだ、ど田舎ではない。

とうかマジここどこ？

ライトノベルの世界に転生ってどこのライトノベルだよ！

いやでも、看板は日本語だし日本であることは確かみたいなんだけれども。

場所がわからないのでズボンのポケットに入っていた自分のスマホで中学校を探す。

スマホには百万以上課金したゲームも性癖がたっぷり詰まっていた画像もすべて消

えている。

泣きたい。

サービス開始から今までずっとプレイしてきたのに。

自分のスマホには金時がない、頼光ママや酒吞童子、茨城童子もいない。

しかもこの世界には仮面ライダーもなければドラクエもないあるのはそのパチモン

だけ。

ドラグソボールというドラゴンボールのパチモンすらもあつた。
バキもなければ史上最強の弟子もない。

ドラえもんもない。

クレヨンしんちゃんもない。

そもそも、スマホで調べる限り前世で読み漁っていたライトノベルやアニメなどが一切ない。

聖書や古事記、神話関係は普通にあつたけどむしろそれ以外がない。

ホントにどこなんだここ。

そんなことを思っているうちに通う中学校についた。

うん、普通の中学校だ。

さて、場所もわかつたところで帰るか。

「あ、ワイルドターキーまだ家にあつたかなあ」

バキのとあるキヤラに憧れてハマつた酒が家にあつたか頭を動かす。

……………飲みきつてなければまだ1瓶あつたはず。

……………あるよな？

この姿で酒なんて買えるはずもないので残っていて欲しいものなんだけれども。

……………そういうえば駒王町ってなんか聞いたことあるな。

なんのラノベだったかなあ。

確かヒロインが巨乳だったことは思い出せるんだけど。

そもそも今は原作前なのかすらわからん。

あー、面倒くさあ

帰って酒飲も、そうしよう。

「っあ」

ため息をつきながら歩いたせい目か目の前にあつた石に躓き体が前のめりに倒れ「大丈夫によ？」

.....なかつた。

☆

筋肉だった。それはもう圧倒的な、筋肉だった

確かに自分の体が中学生にしては小柄だろう小学生に間違われても仕方ない位ではある。

だが、それでも体重は30キロ前半のこの体は軽くないはずだ。

それを軽く持ち上げる巨木を、思わせるような圧倒的安定感を感じさせるその腕。そして、只者ではないことを感じさせるその存在感。

「大丈夫によ?」

破壊力抜群の語尾。

「あつはい、どうもです」

一時的に全く機能しなくなった俺の脳みそ。

倒れそうになった俺の体をひよいと抱き上げきちんと立たせてくれる猫耳をつけたおねえ……………お姉さん?

「怪我は無いによ?」

この人をお姉さん扱いすると俺の前世含めての価値観が崩壊する気がする。

この人はこの人だなそういう事にしよう。

「あつはい、無いです」

自動的に無難かつ失礼のないように動く口。ナイスだ。

この人に殴られれば俺は終わる。

それだけは本能で分かった。

「それは良かったによ、きちんと前を見ないと危ないによ。僕ちゃん」

恐らくだが俺の頭なんざ軽く握りつぶせるであろう大きな手で優しく撫でてくる。

いやしかし、撫でられてる頭からその体に詰まっているであろう筋肉の圧からこの人には逆らわないでおくと本能が訴えかけてきた。

マジで誰だこの人！

「あつはい、どうもご迷惑お掛けしました」

こんな存在感のある人物絶対物語の主要人物だよな？覚えてねえぞこんな人！

「じゃ、ミルたんはもう行くによ。気をつけるによ僕ちゃん」

につこりと笑ってバイバイと手を振るミルたんという人。

優しい人だな。

え、てかミルたん？

あの見た目で？

てかあの筋肉でなんで猫耳？

いやよく思い出せば男物の服じゃ無いやん。

え？あんな筋肉でミルたん？

あんな筋肉で、猫耳？

あんな筋肉で、あの服？

てか、胸筋やべえな。

.....胸筋て胸だよな？

.....あのデカさなら巨乳になるのか？

て事ならヒロインあの人？

マジで？